

# 荒木山通信

令和元年8月

## 第6号

荒木山の古墳  
を顕彰する会

### 北房の古代が熱い！

国道三一三号線が下中津井の蟹川から中津井の街に入る所に「貝原ダワ」と呼ばれる小さな峠がある。古くはこの道は無く、中津井川沿いを少し下つて川を渡り峠部へと出ていたと言う。峠の信号の傍を西側の山へと上ると、左手に芋岡の観音堂に続く墓地群が見えてくる。この丘陵の途中を切り割つて道を通し、その先に丸山を残しているのがよく分かる。

た。その中には十二体余の人骨や犬の頭骨なども含まれていた。陶棺内からは美しく飾られた金銅製の「頭椎大刀」(約100cm)が出土し、被葬者は畿内政権の護衛兵で、任務を終えて下賜されたと想定された。古墳は六世紀



〔土井2号墳の横穴式石室全景〕 北房町史より



〔頭椎大刀〕(土井2号墳出土) 北房ふるさとセンター



〔佐井田城址遠景〕 運動公園側から

昭和五十三年(一九七八)、国道拡幅のため発掘調査がなされた土井二号墳は、その堀切の中にある、以前の宅地化や道路の新設などにより墳丘と天井石は削平されていたが、横穴式石室内から多量の遺物が発見された。

永禄十二年(一五六九)、毛利元清が時の城主植木秀長を兵糧攻めにした時、備前の大喜多直家に援軍を求めて勝利した。



〔佐井田城址五の壇からの遠望〕

の後半に造られ、約一五〇年間追葬がなされたという。前述のとおり、当時は貝原ダワは無く、丘陵の南西(中津井の街側)裾に石室の出入り口があり、度々追葬がなされたのである。この土井二号墳は、対岸の下村古墳と共に中津井地域の有力家父長の墓所と考えられている。此处にもロマンの遺跡が眠る。

眼下に中津井での源平合戦の古戦場があり、源氏方が陣を備えた丸山、そして備中の平家方が集結し陣を備え対峙した東山が見える。平家方は数日の熾烈な戦いで滅亡したといわれ、戦功のあつた山田重英がこの要衝の地に佐井田城を築いたといわれている。

藤原朝臣経衡そして、この峰続きの真滝山は援軍を求めた使者が合団の「のろし」をあげた山とされている。

古代、中世、近世の文化遺産が集積しているこの「悠久の里・中津井」のロマンは奥深く広い。

〔中嶋ひろし〕  
前筑前守五位上

【特別寄稿】

### ザ・プラザ ふる里

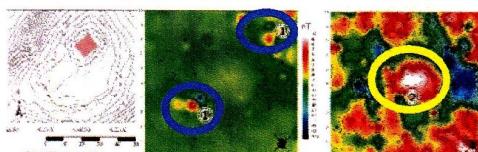
その際に高機山に勝利の旗を立てたことから建旗山と呼ばぶようになつたという。ちなみに、平安時代に大嘗祭の主基田が中津井に設けられた時の和歌に高機山が詠まれている。

色々におれる錦と見えつる  
は高機山の紅葉なりけり

## 東塚調査報告第一弾 墓壙に副葬品か？ （磁気探査で判明）

前号でレーダー探査の結果、後方部に割竹形木棺直葬か粘土槨の墓壙と堅穴式石室らしき施設が確認されましたことをお伝えしました。今回、磁気探査により金属製の副葬品らしき反応が確認されたことをお知らせします。

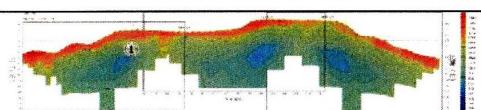
磁気探査の結果 図① 左の赤色が後方部  
中央の赤い反応（青の輪）は金属ゴミの反応  
右側の白い反応（黄の輪）が副葬品らしき反応



金属製の副葬品は⑦⑧⑨が想像されます。私は⑦を期待したいのですが、正確には発掘しないと分かります。

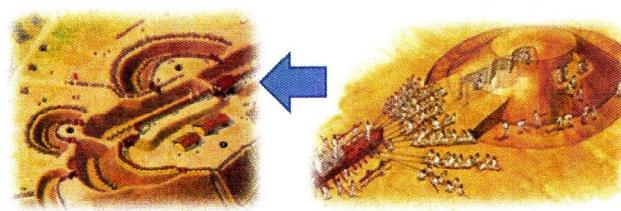
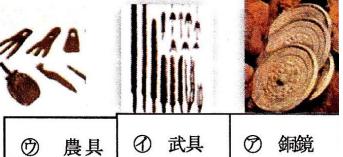
上図② 右から後方部墳端、中央部前方部墳端  
印の北西（北房中学校）側で盛土が多い。

下図③ 墳丘の縦断面、右が後方部、左が前方部



中世、山城に改変！  
次に、電気探査の結果で  
図②が後方部二ヵ所と

は、当時の北房の様子を知りたいです。金属の加工技術や大陸及び他の地域との繋がりも想像できます。初期の古墳には銅鏡が副葬されていました。初期の古墳には銅鏡（魏の国王が邪馬台國の女王卑弥呼に贈った鏡）でも副葬されていたら大事です。



中世山城改変想像図⑤  
(周りに土塁を築く)

古墳築造時の想像図④  
(前方後円墳の例)

前方部一ヵ所を電気で横割りした図で、図③が墳丘全體を縦割りした図です。赤い部分が人の手で盛土した部分です。古墳築造時の盛土なのか、中世の山城に改変した時期の盛土なのかは実際に発掘で土質を調べないと分かりません。

図②では急斜面の北西（北房中学校）側で多くの盛土が見られます。おそらく中世の戦いに備えた土塁築造のためでしょう。南東側は掘削して兵士が集まる平坦面にしたのでしょう。前方後

方墳の形状がかなり改変されています。つまり古墳築造時の想像図④が、中世山城として想像図⑤のように改変されたのでしょうか。なんとも辛い感じです。

ともあれ、現状では前方

## 古代の道の謎

荒木山の古墳を顕彰する会  
副代表 南條保之

古代の人々はどのようにして北房の地にやつて来たのだろうか。

昭和四八年に中国自動車道の建設に伴い発掘調査が行われた。最初に行われたのが五名の備中平遺跡で、

古墳築造の結果、縄文時代から中世に至る多くの遺構、遺物が発見された。中でも表面に米粒状の文様が施された押型紋土器があり、これは縄文時代の早期に流行したもので、北房では最も古い人類の活動を物語る遺物である。また、上水田の谷尻遺跡、下呂部の空遺跡でも同様の土器が発見されている。縄文時代から北房の地に人々が居たことが確証されたが、少量であり、

方墳の形状がかなり改変されています。つまり古墳築造時の想像図④が、中世山城として想像図⑤のように改変されたのでしょうか。なんとも辛い感じです。

ともあれ、現状では前方

後方墳の形状は認められるので、一層整備して皆様の古墳見学に備えます。

次回は、三次元測量の結果を素晴らしい画像で紹介します。

（奥田健治）

時代は下り弥生時代（紀元前四〇〇年～紀元後二五〇年）になると、中津井の白鳥谷遺跡、皆部の桃山遺跡、上水田の小松遺跡、中田原遺跡、谷尻遺跡が発見されています。中でも谷尻遺跡では、多くの堅穴式住居と墓が発見されており、集落を形成し水田開発、経営を行っていたと考えられています。これらの住居跡から表面に米粒状の文様が施された土器があり、これらは、壺、甕、高壺、鼓形器台など多くの土器が発見されている。県南部の物も多いが、特に畿内系が多い。このことから、畿内から移り住んだ集団ではないかと考えられているが、どこをどのようにして来たのか立証するものは無い。

やがて古墳時代（三世紀

（七世紀）に入ると荒木山東塚を最初とし北房の地域に二五〇基余りの古墳が築かれる事となる。（ちなみに荒木山東塚は、時代的に考えると谷尻遺跡の首長墓の可能性も。）

七世紀に築造された六基の方墳、その中で大谷一号

崇神天皇陵を  
拝す



【崇神天皇陵正面の拝所】

墳は大和政権から派遣された吉備の大宰石川王の墓と考へられている。では、どうやうな道を通ってきたのか。また、どのような方法で中央と連絡を取っていたのか。それを探る資料は見当たらない。

時代はずつと下り、戦国

時代佐井田城攻防の戦史に見られるように、宇喜多・毛利・尼子等が南北の道から二万、三万という大軍で押し寄せ攻防を繰り返したという。永禄十二年（一五六九）、植木秀長は毛利元清の三万騎の大軍を迎えて井田城に籠城した。備前

半（古墳時代前期後半）の早い時期とされる。私たちは一行五人が周濠の堤を時計回りに進むと驚くべき光景が出現した。なんと濠が三段に築かれているではないか。池を三段に積み重ねた様である。不思議な感覺でいると、六、七人の若い男性が濠の外を巡っている水路の点検をしているに出会つた。

古墳は全長が約二四二m、後円部の径は約一五八m、その高さは約三一mで、全国十六位の巨大前方後円墳である。築成は、四世紀後

「この濠は、最初から三段に造られているんですか？」  
中から答えた。  
「元々は十段ほどもあつたのを織田氏の時代に、農民の水不足解消のために改変しているんです。」  
彼らは宮内庁の職員で、陵墓の点検に回っていると言ふ。やがて古墳の深い森へと消えて行つた。周濠は、左側が三段に、右側は二段に築かれていた。



【崇神天皇】

「大日本帝紀要略」から

われている。柳本町自治会では、今でも毎年七月に藩主の子孫を招いて「藩主祭」を行い、遺徳を偲んでいるという。

この古墳は、奈良県天理市柳本町字行燈に在り、「行燈山古墳」とも呼ばれている。なお、崇神天皇については諸説あり確たる定説はないようだ。

つたという説もある。また、毎年を二五八年説をとれば、邪馬台国の時代後半と重なることになり、邪馬台国とヤマト政権（初代崇神天皇）との関連が問われることになる。謎と口蔓の尽きない崇神天皇陵であった。

（久松秀雄）

## 『入会のすすめ』

趣旨に賛同し入会を希望される方は、本会役員にお申し出下さい。年会費三千円は、入会時に納入下さい。我々と一緒に活動や研修をしようではありませんか。会員へは、活動状況や計画、研修会・講演会等の案内をします。

過ぎないが、有漢、吉備中央、足守、岡山の線ではなかろうか。

古代の道は、旭川沿い、高梁川沿い、山越え、三つの道であったのだろうか。

\*\*\*

# 古市・百舌鳥古墳群

## 世界遺産に！！

荒木山の古墳を題彰する会

顧問 戸村 彰孝

古市・百舌鳥古墳群が  
世界遺産に

五月十五日、各紙の朝刊は仁徳天皇陵（大山古墳）や応神天皇陵が世界遺産に登録されるというニュースで大騒ぎ。地元は観光で、研究者は天皇陵の公開や発掘を求めて智慧比べが始まる。

そこで私は昔のことを思い出した。戦時中、国民学校で習った、仁徳天皇が高殿に立つて村々のかまどの煙が消えている状況を見て心配された話を――。



【仁徳天皇】



【古市・百舌鳥古墳群の世界遺産登録を伝える記事】  
(五月十五日の朝日新聞朝刊の一面)

図書館を訪ねて、昭和十八年発行の「初等科国史」を見つけた。今、八十五歳前後の人は、この教科書で勉強したのである。このことが既に歴史の一齣となってしまった。一節を再録してみた。

○ 大和の國原  
かまどの煙 ○  
第十六代仁徳天皇は、都を難波におうつしになりましたが、それも、半島との交通の便をお考えになつてのことです。・・・

不作の年が続いたころのことです。ある日、高殿にのぼつて、遠く村のやうのぼつて、遠く村のやうすをごらんになりますと、民家から煙一すぢ立ちのぼらぬい有様です。天皇は、民草の苦しみのほどを深くお察しになつて、三年の間、かまどの煙が消えている状況を見て心配された話を――。

今の子供たちは、古墳時代・大和朝廷などの項目で学習しているのだろうか。

かうして、三年ののち、ふたび高殿からごらんになると、今度は、かまどの煙が、朝もや夕もやのやうに、一面にたちこめてゐます。天皇は、たんいそうお喜びになつて、「朕すでに富めり」と仰せになりました。

○ この故事は八世紀初頭撰上された古事記や日本書紀に記載され、十三世紀鎌倉時代の方丈記にも「伝えられたむいて、戸のすきまから雨風が吹き込むほどになつていきましたが、天皇は、少しもおいとひになりました。

かうして、三年ののち、ふたび高殿からごらんになると、今度は、かまどの煙が、朝もや夕もやのやうに、一面にたちこめてゐます。天皇は、たんいそうお喜びになつて、「朕すでに富めり」と仰せになりました。

○ この故事は八世紀初頭撰上された古事記や日本書紀に記載され、十三世紀鎌倉時代の方丈記にも「伝えられたむいて、戸のすきまから雨風が吹き込むほどになつていきましたが、天皇は、少しもおいとひになりました。

### 令和元年度 後期の活動

#### 環境整備への協力と 一墳丘調査への協力

平成二八年二月発足以来、古墳やその周辺・登山道の整備や掃除を続けてきました。引き続いて行いたいと思います。また、市へ依頼して、測量調査が昨年から始まり、本年度も引き続いて行われます。昨年度は東塚でしたが、本年度は西塚が調査されます。本会としても調査に協力し、その結果に期待したいと思います。会員は元より、皆様方のご協力・ご支援をよろしくお願い致します。

春にできなかつた柴かきも調査が始まる前には行いたいと思います。そして、古墳の雄姿が少しでも見えるようになると行った東塚北側斜面の雑木や竹の伐採作業も引き続いて行つてきました。ものと考へています。

通信や調査報告会等で、この古墳の素晴らしさも伝えて行きたいと考へています。